

---

# モンスターハンター ~ 集いし者達と白き龍神 ~

流星

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

モンスターハンター ～集いし者達と白き龍神～

### 【Nコード】

N3041Y

### 【作者名】

流星

### 【あらすじ】

ドンドルマ、シュレイド地方を騒がせた狂化竜事件。伝説に語られた黒龍が降臨し、討伐され、新たな英雄が誕生した。彼らはそれぞれ別の道を歩み、各地へと散って行った。同時に暗い噂が広まり始めたあの日から数年。

舞台は東方へと移され、新たな物語が紡がれる。

一度は幕を閉じた彼女たちのゲームはどのような流れを生み出すのだろうか。

モンスターハンター3の要素が追加されますが、同時に相変わらず

オリジナル要素が強い作品です。

## 火竜の双子（前書き）

お久しぶりです。

いよいよ続編がこれから始まります。

予告通り東方……モンハン3の舞台となった世界が基本となります。

更新はゆっくり（不定期）になるかもしれませんがなのであらかじめご容赦くださいませ。

では第一話、どうぞ。

## 火竜の双子

乾いた大地に強い日差しが差し込む砂漠。広々とした砂の大地、点々と存在する隆起した岩やその日差しを遮る岩山。食料となるものはほとんどなく、容易に立ち入ったものはその太陽の光に焼かれて水分と共に体力を奪っていく過酷な環境。

そんな砂漠に二つの人影があつた。

一人は高く聳える岩の陰に身をひそめ、一人は離れた所にある岩の背後に回っている。その岩は中心部分が存在せず、まるで自然の門のような形になっている。一体どういう事があつてこのようなオブリエとなつたのか不明だが、岩の下に入り込めば日差しを避ける事が出来る。

そして二人の服装はこの砂漠を超えるという旅人の格好ではない。それはまさに戦う者の格好だ。

一人は紫色の長髪を赤いリボンで結んでツインテールにしており、気の強そうな碧眼をした少女。黒を基準とした動きやすさを考慮され、それでいて腹が綱によって露出した装備をしている。

背中には同じく黒を基準とした長刀を背負っており、右手は柄を握りしめていつでも抜ける状態にある。

もう一人は岩から少しだけ顔を出している少女だ。先ほどの少女とよく似た顔つきをし、紫色のロングヘアをそのまま流している。同じく長く伸びているもみあげが頭を守る防具から顔を出しており、左側にはお揃いらしい赤いリボンが巻かれていた。

彼女の装備は金属部分以外は褐色に染まったものであり、その出で立ちはまるで騎士を思わせるものだ。左手には白い盾を構え、右手には金属の銃槍に白い毛をあしらった武器を構えている。

その少しやる気のなさを感じさせるような半目の碧眼はじつとあ

る一点を見据えている。

向こうにいる彼女も同じように一点を見据えている事だろう。  
それが今回の獲物。

二人が見据える先には少し小高い丘のようになっていた。砂の大地。そこには二匹のモンスターが頭をぶつけ合っていた。ねずみ色の体をし、扇状の襟飾りを持つ四足の竜。お互いに相手に向かって突進し、強固な頭をぶつけ合ってどちらが強いかを示しているのだ。

ぶつかり、離れ、そしてまたぶつかり合う。

リノプロスと呼ばれる草食竜だ。砂漠や砂原という乾燥地帯に主に生息し、硬い甲殻を持つ事で知られている。

お互い頭突きし合っている彼らを見つめているが、二人の狙いはあの二匹ではない。

額に浮かぶ汗をハンカチで軽く拭い、ポーチから水筒を取り出して水分補給をする事数十分。ついに状況が動いた。

「……………来た」

ぼつりと眩きながらすうつと目を細める。

それは小さな変化だった。ぶつかり合っているリノプロス達の奥、砂の丘の下からゆらりと砂煙が小さくのぼっているのだ。それがゆつくりとあの二匹へと近づいていく。

だが二匹はお互いしか見えておらず、しかも音を極力立てていないためにその砂煙の接近にまったく気づいていない。

やがて砂煙は二匹の数メートル付近まで接近し、再び頭をぶつけ合ったその瞬間にそれが現れる。

茶色い甲殻を持つ二頭の蛇が同時に砂の中から現れ、リノプロス達の背後から口を開いて喰らいつき、最後にもう一頭の蛇が真ん中から牙を剥いて現れ、二匹の頭に喰らいついてしまった。

悲鳴を上げる間もなく背後、頭部から蛇に喰らいつかれたリノプロス達は悲鳴を上げる間もなくその蛇に捕食されてしまった。硬い

甲殻などものともせず、その下にある肉まで喰らいつくその蛇はリノプロスの体を引き千切り、それぞれの糧として食事が開始された。甲殻を砕く音、肉が咀嚼される音、血が噴き出す音と響かせながら、一気にリノプロスの姿が蛇の口内へと消えていく。よく見れば蛇の首は一つへと集まり、少しだけ砂の上へと覗かせている体に繋がっていた。

つまりあれは別々の蛇ではなく三つの頭を持つ一つの個体という事になる。

ヒュドラ。

蛇竜種、ヒュドラ族に分類される多頭蛇竜種の代表格の竜種である。

三つの頭はそれぞれ意志を持ち、それぞれ独立して動く事が可能だ。それを生かして三方向を見る事が出来、およそ死角というものを持たない存在だ。また二つの頭が眠っていても、一つの頭が起きて辺りを警戒する事も可能であり、それが奇襲を封じるため容易に不意を突く事が出来ない。

主に砂漠や峡谷という乾燥地帯に生息し、深い山に身を潜める事もある竜であり、砂の中や洞窟などから得物を狙い、三つの首による奇襲や毒霧で獲物をしとめる事で捕食している。

そして今、三つの頭は食事に夢中になっている。一つの体を共有してはいるが、それぞれの意志は食事に対する渴望があるようだ。久しぶりの食事なのだろうか、珍しくリノプロスを食べる事に意識を向けている。

これは好機か。

そう感じた一人が岩からゆっくりと移動を開始する。

音を立てずに静かにヒュドラの背後へと回り込むように低姿勢で歩き、右手は相変わらず背中にある長刀の柄にある。その様子を見守りつつもう一人はポーチから黄色い液体が満たされた瓶を取り出し、蓋を開けて中身を一気に飲み干していく。

「……ふう」

空き瓶をポーチに戻してもう一度ヒュドラへと視線を向ける。その時には既に彼女は奴の背後を取り、着実に距離を縮めて斬りかかるタイミングを窺っていた。

やがて彼女は足に力を籠め、背中から褐色の翼を生やして一気に広げ、砂を蹴りながら低姿勢のまま飛び上がる。数度翼を羽ばたかせて高度を得ると、すぐに翼を畳んでヒュドラへと急接近しつつ長刀を抜いて背後から背中を一文字に斬り伏せる。

「ジャーーツ!？」

食事中に乱入してきた敵に驚き、一つの頭が悲鳴を上げ、一つの頭はすぐに背後を振り返って敵を確認する。残りの一つは敵を確認しつつ辺りを警戒し始めた。

だが少女はヒュドラの側面に降り立ちながら手にする長刀、ヒドウンサーベルを構えつつ畳んだ翼をほぐすように何度か羽ばたかせてにやりと不敵に笑う。

そんな彼女の背後の砂が舞い上がり、茶色の鱗に覆われた尻尾が現れ、彼女を叩き潰そうと振るわれる。だがそれを察知して横に跳び、下段に構えなおしたヒドウンサーベルでヒュドラの胸を斬り上げる。

そんな彼女へと一つの首が噛みつきにかかるもその動きを見切っている彼女に掠りもしない。翼を羽ばたかせて空中を移動し、向かってきた首を斬りながら彼女はもう一人の少女がいる方へと首が向かないようにしていた。

それを察知したもう一人の少女は岩から飛び出し、ヒドウンサーベルを振るう少女と同じ褐色の翼を広げてヒュドラの背後から一気に接近してくる。

彼女の気配に気づいたのだろうか、右の頭がびくりと反応して振

り返る。そんな奴へと彼女は手にした白いガンランスを突き出し、その額を槍が貫く。続けて柄にある引き金を引けば、銃口から爆発が起きて頭を焼かんとする。

「ジュルアツ!？」

「さてさて、行きますか」

少し気の抜けるような声で呟きながらそのガンランス、ヘルステイング改を振るって焼いた部分を斬る。抵抗するように首を振るも、彼女は落ち着いて一度距離を取り、前に進みつつまたヘルステイング改を突き出し、だが中心の頭が彼女へと喰らいつこうとしたため、轉身しながら盾を構えて防御する。

「シャアツ!」

ガチツ、と音を立てて盾と頭がぶつかり合うが、どういうわけかその盾はぶれずに噛みつきから頭突きへと切り替わった頭の攻撃を受け止めている。

利き腕ではない手で縦を構えているにもかかわらずにその力に抗う。少女の華奢な左腕とは思えないその力、背中に生える褐色の翼……人間ではないことは明らかだ。

「はっ!」

少し引いて顎を穿つように盾を振るい、あらかじめ引き絞っていた引き金を離しながらヘルステイング改の切っ先を顔に向けてやれば、溜めこまれたエネルギーが解放されて通常以上の爆発がヒュドラへと襲い掛かる。

しかしヒュドラは三つの頭を持つ竜だ。

一つの頭が怯んだとしても、別の頭が反撃を仕掛けてくる。

最初に仕掛けた右の頭が彼女へと噛みつきに来るが、それに気づいて背後へと跳んで回避し、回り込むように旋回する。

その間にもう一人が左の頭へと何度も斬りかかってダメージを与えていた。何とか喰らいつこうとしているようだが、彼女の空中移動が速いために捉える事が出来ない。

後退、旋回、クイツクターン……翼を巧みに使い、見事な移動を繰り返してヒュドラを翻弄するように飛び、隙あらばヒドウンサーベルで斬りつける……見事なヒット&アウェイの戦法だ。

「シュルルル……シャツ！」

このままでは埒があかないと判断したのだろうか、その左の頭は一度退くように砂へと向かって頭を沈めていく。それに続くように他の頭、それに繋がった体と続き、砂煙を巻き上げながらその姿が完全に地中に消える。

逃げたわけではない。

気配はまだ地中にあり、この場から離れる様子はない。宙に停滞し、ヒュドラの出方を窺う様子だ。

「感じる？」

「おー、もちろんですよ。あれほどの気配、そう易々と逃がしませんよ」

「ま、そうね。……む？」

二人の背後からヒュドラの一つの頭が現れ、二人へと噛みつきにかかるも動きに気づいていた二人は難なく回避。だがもう一頭が逃げた一人の前へと現れ、今度は噛みつくのではなく毒霧を吐き出してきた。

「ちっ」

人間ではないにしろ、毒霧を吸い込めば倒れ、死に至る事もある。急旋回して毒霧を回避し、回り込みながら横に立てたヒドウンサーベルで顔から首にかけて斬っていく。

しかし続けて出てきた尻尾が彼女を叩き落そうと振るわれる。

「遅いつ！」

ぐるんと体を回転させながら横に飛び、反撃するように一太刀振るって尻尾を切断しようとするが、たった一太刀で切断できる程ヒュドラの尻尾は軟ではない。

向こうではヘルスティング改を振るう彼女の妹がいる。最初に奇襲を仕掛けてきた中心の頭へとヘルスティング改を突き出し、引き金を引いて焼き払う。

反撃に毒霧に加えて口から何らかの液体を吐き出してくるようになったが、彼女はいたって冷静だ。盾を構えずこの液体は回避する事を選択する。

これもまた毒性の強い溶解液であり、浴びれば溶かされるか毒に侵されるかの二択となる。つまり盾で防いでもその盾が溶かされて使い物にならなくなってしまうかねない。

回避は正しい選択だ。

「ふっ、はっ！」

それは堅実な攻め。相手の動きを見切って防御し、隙を見て攻撃する。

確実にダメージを与え、確実に身を守る。基本を高め、それを用いて戦う彼女。重量級であるガンランスをまるで自分の手足のように軽々と振るい、空中移動を繰り返しながら攻める彼女は実に安定感がある。

「シャツ、シャシャ……ッ!?」

その鋭い牙で捉えきれず、毒霧も溶解液も当たらない。逆に少女二人の攻撃は着実に自身の体を傷つけていく。その事にヒュドラ達は戸惑いを覚え始めた。

ならばとヒュドラ達は三つの頭が同時に息を吸いこみ、一斉に毒霧を放出する。一つの頭によるものではなく、三つの頭が同時に吐き出す事でその範囲を広げたのだ。

だが二人は一気に背後に下がる事でその毒霧をやり過ぎす。それだけではない。二人もまた息を吸いこみ始めたのだ。

「ふっ!」

そうして勢いよく吐き出されたものは、火炎だった。二人の口からまるで火炎放射機の炎の如く灼熱の炎がヒュドラへと向かって放たれる。それは毒霧に紛れて移動しようとしたヒュドラを焼くよりも早く、その毒霧に反応して爆発を起こす。

爆発の中悲鳴を上げるヒュドラを見ながら、ヒドウンサーベルを構える少女はまた不敵に笑う。

「なんか、案外あっけなくない?」

「おー、あまり調子に乗らない事ですよ。普通はあの三つの頭だけでなく砂に足を取られそうになるのを気をつける、という要素も含まれるからやり辛いですからね。私達は翼があるから空中戦が出来るからこそ、そのリスクがなくなっているわけなんですから」

「わかってるわよ。ちよつと言ってみただけじゃない」

「それならいいですよ。油断はするな、姉さんや母さんがよく言ってる事ですよ。竜じゃなく猪になって忘れない事ですよ」

「誰が猪じゃこるあ!?!」

「え？ 誰って……」

意外そうな表情でじつと姉の顔を見つめる妹。そんな彼女にぶるぶると体を震わせつつ「……一度きつちり話しつけようか？ 妹よ」と呟くも、そんな姉に動じることなく「ははは、これが私だっというのは生まれた時から一緒だからわかりきってることでしょうに、姉よ」と返してしまふ。

敵が今もすぐそこにいるというのに二人の様子はいつも通りだ。リラックスしているだけでなく勝機がもうそこまで掴めるという状態だからこそ出来る芸当か。

「さあさ、もう終わるんですから、そうかつかせずに戦いましょう」

「いや、誰のせいだと思ってるのよ……」

「え？」

「あんただ、あんた！ ……ああ、もう！ 召炎！」

左手から炎が吹き出し、握りしめたヒドウンサーベルの柄を伝って刀身に纏われていく。たちまち黒い刀身は炎に包まれ、そして炎はゆっくりとヒドウンサーベルに吸い込まれ、赤い紋様となる。

それを見た妹はヘルステイング改を構え、ぐっと引き金を絞りながら突撃体勢を取る。

「シャアアアアアアッ！！」

それを迎え撃とうと三つの頭が一斉に牙を剥き、再び毒霧という防壁を築き上げる。だがそんなものは意味のない事だった。

口から火炎を吐き出して毒霧を爆発させてヒュドラを怯ませ、その隙をつくように彼女は数度羽ばたいて高度を高め、一気に急降下するようにヒュドラへと向かっていく。

いつの間にか彼女は赤いオーラを体に包み込ませいる。それは彼

女の周りの温度を高めおり、ヘルスティング改から放たれる冷気をも蒸発させて薄い水蒸気を作り上げている。

それを纏いながら中心の頭へと向かった彼女はその額を貫くようにヘルスティング改を突き出し、溜めこまれているエネルギーを解放させる。

「シャアアアアッ!？」

それはガンランスにとって最大の一撃、竜撃砲。文字通りヒュドラの頭を吹き飛ばしてしまったその一撃を与えた事で残りの頭が動揺を隠せない。

ガシャン、と音を立ててヘルスティング改の一部の蓋が開いて竜撃砲を撃った後の排熱を始める中、彼女は軽くヘルスティング改を振るってリロードし、怯んでもなお喰らいつきに来る左の頭に合わせ、盾を構える。

続けざまに接近してきた右の頭へと向けてヘルスティング改を向け、引き金を引いて迎え撃つ。

「はっ!」

怯んだ二つの頭を視認した姉は左の頭めがけて一気に急降下していく。その速さは先ほどの妹以上のものであり、十数メートルの距離を一気に縮めていく。しかも炎の力を宿らせたヒドウンサーベルは彼女の気も纏われ、その殺傷力を更に高められていた。

その一撃は今まで以上。

ヒドウンサーベルの切れ味と彼女の気、そして紅蓮の炎の力を宿すその刃は一瞬の内に左の頭を焼き切ってしまった。今まで付けていた傷、気を纏わせた一撃とその内部の肉を焼く炎の力が合わさった結果だ。

宙に舞うその首を横目に、ヒドウンサーベルを構えなおしながら

右の頭を確認すると、妹が盾を叩きつけつつヘルステイング改で攻めているところだった。

盾はなにも敵の攻撃を防ぐだけではない、それは一種の鈍器と成り得る。噛みつきに来るそれを受け止め、振り下ろし、振り上げをして頭を揺さぶり、とどめとばかりにヘルステイング改を突き、突き、振り下ろして切り裂きつつ引き金を引き絞ってエネルギーを溜め、顎下に潜りこみつつヘルステイング改を頭上に突き上げつつ引き金を離し、銃口から盛大に爆発を引き起こした。

しかしそれではヒュドラも瀕死にはなるが命を奪うまでには至らなかった。奴とて竜種的一种だ。顔に多くの傷を負おうが、爆発によつて焼かれようが、それだけで死ぬほど弱い生命力を持つてはいない。

それを終わらせるのがもう一人、ヒドウンサーベルを下段に構えて再び一気に接近し、首を刎ね上げるように振り上げる。

ヘルステイング改によつて甲殻を貫かれ、焼かれたことによつて柔らかくなってしまったその部位を狙った一撃は、再びその頭を刎ね飛ばしてしまうかと思われたが、残念ながらそれは叶わず、首を斬るだけに留められた。

だがその傷から勢いよく血が噴き出し、茶色い甲殻を赤く染めていく。

「ク……シ、シシ……シャ……ッ！」

「さて……楽にさせてあげましょうかね」

致命傷の一撃だろうがまだ生き長らえている。呻き声を漏らしながらも攻撃しようとしているヒュドラをじっと見つめた彼女は、ヒュドラの頭上を取つて勢いよく額めがけてヘルステイング改を叩き落とし、その衝撃によつてギミックが動く。

リロードされている弾薬が一気に動き、引き金を引けば全ての弾薬が放出されてヒュドラの頭を焼きにかかる。傷口を広げるような

一撃にヒュドラはまた怯んでしまい、その隙にヘルステイニング改を横に振って再びギミックを利用して弾薬を装填。

引き金を引き絞りながら爆発で吹き飛ばした部分を狙って槍をねじ込み、中心の頭と同じく頭を吹き飛ばすような溜め砲撃を叩き込む。

「シャ、アア……アア………」

頭を吹き飛ばされ、首からはとめどなく血が流れ、ついに残った頭もまた生命力が尽きてしまう。ゆつくりとその首が砂に向かつて倒れていき、鈍い音を立てて体と共に砂へと横たえてしまった。

その死体は体の半身が今もなお砂に沈めたままという形になってしまった。普通の戦いと違い、空中戦を主としたために首が二人を追う事が多かったためだ。半身は後で引き上げる事になるだろう。

何はともあれヒュドラを討伐する事に成功した。

二人は息を吐くとゆつくりと地面に着地する。

だがどういいうわけか姉の表情が少しだけ硬くなっている。対して妹の表情はいつも通り少し気の抜けるようなものだった。

ガシャン、と音を立ててヘルステイニング改を背中に担いだ彼女は軽く首と肩をほぐすように動かし、

「とどめは私でしたね。ということで、奢り決定です」

「くっ……あれが決まっていたら……！」

またしても体をふるふる震わせ、手にしているヒドウンサーベルを軽く振って背中にある鞘に収める。

一体何のことかといえば二人は狩りに行く前に賭け事をしているのだ。多くはとどめを刺した方の願いを敗者が叶えるというもので、今回は両者とも勝てば帰った後の食事を全額奢りという形になっている。

姉の言う通りあの最後の一撃によってヒュドラが倒れていれば彼女の勝ちだったろうが、残念ながら持ち前の生命力によって命を繋いでしまった。そこを妹が決める事になったために彼女が勝つ事になってしまった。おいしいものである。

「さてさて、久しぶりにガンガンいきたい気分ですね」

「……少しは抑えなさいよ？」

「ははは、今ロククラックでは肉フェアをやってましたよね。いい機会ですからじっくりがつつり味わいたいと思ってたのですよ」

「だからこそ抑えろって言うてんのよ！」

「え？ 何を言っているのです？ フェアだからこそガンガンいかなくてどうするんです」

「うがー！ーッ！！」

被っている頭の防具を砂に叩きつけてがしがしと髪を掻き回し、敗者は吼えるしか出来ない。そんな彼女をにやにやと笑う妹は本当にいい性格をしている。

「それに瑠璃こそ同じことを考えていたんじゃないんですか？ もしあの一撃が決まって賭けに勝つていれば、私にかなりのものを払わせる腹積もりだったでしょう？」

「ぬ、ぐ……」

「それじゃあ何も文句は言えないでしょう、はっはっは。賭けは賭けですからね、私は瑠璃の金でガンガンいかせてもらいますよ」

「……ちくしょうめ。覚えてなさいよ、茉莉……」

砂に叩きつけた防具を拾い上げ、ぱんぱんと砂を払って被り直し、ポーチから発煙筒を取り出して着火する。クエスト完了を知らせる色の煙が空へと舞い上がり、音を立てて破裂する。

これでギルドのアイルー達に連絡が行くだろう。後はあの死体か

ら出来うる限りの素材を剥ぎ取っていくだけだ。

腰元から剥ぎ取りナイフを取り出した二人は正反対のテンションでヒュドラの死体へと向かっていくのだった。

数分後にやってきたアイルー達が用意したロープをヒュドラの体に巻きつけ、アイルー達の魔法とアイルー達と二人力技でその死体を何とか引き上げ、残った素材を剥ぎ取った後にベースキャンプへと帰還。

用意されている砂上船で二人は一つの街へと戻っていた。

砂塵の大都市ロックラック。

ロックラック地方と呼ばれる大砂漠のオアシスに存在する街であり、多くの人々が集まる場所だ。モンスターを狩る者、ハンターと呼ばれる職種につく者達にとっての拠点として利用される程の大規模な街であり、ここから名を挙げていく者達も少なくない。

一般人も砂漠を渡るために砂上船や飛行船を利用し、東西南北へと移動するための拠点や休憩するための場所として利用している。

昼夜を問わず街は賑わい、活気に満ちている。

そんな街に日も暮れて夕食時になった頃、砂上船に乗った少女二人がロックラックへとやってくる。

多頭蛇竜ヒュドラ討伐クエストを完了させた二人の凱旋だ。

砂上船の港はこんな時間になってもそれなりに賑わいをみせている。二人と同じようにクエストから帰還してきたハンターもいれば、これからクエストを行うためにこの港から旅立っていくハンターもいる。

ここに一般人がいないのは、この港はクエストのために利用される港だからだ。旅の目的に利用される砂上船の港は別の場所に存在している。

ハンターと一般人、これらが混在しないように港は分けられているのだ。

「さ、覚悟は決まりましたか？」

「……はいはい、もうたらふく食えや、妹よ」

「そうさせていただきましょう、姉よ」

クエストを成功させて帰還してきているというのに、二人のテンションは平常とローというものだ。それに気づいたハンターの何人かは二人の様子に気づき、「失敗してきたのか？」と感じるものと、「ああいつもの事か」と思うものに分かれていた。

特に後者の人達は二人の様子に慣れたようで、姉の様子を見て苦笑するものも混じっている。

そう、二人はこの街では一種の有名人になっていた。

あの頃の未熟なハンターだった少女達はもういない。

ここにいるのは成長して腕を上げ、その名を人々の記憶に刻ませる程になっている。

西のハンター達の拠点であるドンドルマを中心とした大事件の際は未熟者であるが故に母親と姉、その他のハンター達と共に戦う事が出来なかった二人。

父は鍛冶屋を営む竜人族。

母は火竜の因子を持つ有翼種の魔族。

そんな二人の間に生まれし双子の娘。

暁・瑠璃・フレアウイング。

暁・茉莉・フレアウイング。

身も心も成長した竜魔族にして有翼種という稀有な種族である二人の少女ハンターの物語はこれより始まる。



## 肉だらけの夕食

ロツクラックへと戻ってきた瑠璃と茉莉は酒場へと向かい、クエスト成功の旨を伝える。依頼書に受付嬢が完了の判を押し、報酬金と報酬の品を受け取る事でクエストが完了する。

受け取った二つの袋をそれぞれ確認する事にする。瑠璃は袋に収められた金を、茉莉はヒュドラの素材などが入っている袋を。問題ない事を確認した二人は一礼し、酒場を後にした。

この後は食事になる……のではなくその前に向かう場所があった。商店街の一角にあるその露店へと訪れた二人は店の前に掛けられている看板を確認。

ここは交換所と呼ばれる店であり、アイテムやモンスターの素材と店にある別の素材と交換する事が出来る。

その看板には様々な素材が書かれており、多くは竜種の素材を渡す事で素材を得る事が出来るようだった。どうやらここはそれが主なレートになっているらしい。

交換所はここだけではなく、他の商店街にも点々と存在しており、店ごとにレートが違っている。

「いらっしやいませ。トレードいたしますか？」

「ええ。これでトレードを」

茉莉が袋から多頭蛇竜の甲殻をいくつか取り出していく。瑠璃もポーチから剥ぎ取ってきた甲殻を取り出し、店のカウンターへと置いていった。

その数全部で八個。

それを確認した店主は小さく頷き、

「ふむふむ、多頭蛇竜の甲殻八個とマンドラゴラ十六個とトレードですね？」

「はい、お願いします」

店主は「かしこまりました」と一礼した後、後ろに置いてある小箱からマンドラゴラを取り出して二人へと差し出した。その数を確かめ、置かれた甲殻は店主へと引き取られる。

今回ヒュドラのクエストに行ったのはこれがあつたからだ。なかなかマンドラゴラが見つからないため、しょうがないのでこの交換所のリストにあるもので入手しようと試みたのである。

二人で八個ずつ分けてポーチに入れ、交換所を後にする。これで用事は済んだので後は食事の時間だ。

数分かけて飲食店が並ぶ通りへと向かっていき、件のフェアがやっているという店へと入る。ウエイトレスに席へと案内され、御品書きを開けばフェアの影響で安くなっていたりいつもはないメニューがあつたりする。

「さてさて、どれにしますかねー」

「……………」

「これもよさそうですし、これもいいですね…………うん、迷いますねー」

「…………さつさと選びなさいよね」

「え？ こういうのは選ぶのが醍醐味でしょうに。いつも以上にルンルン気分で選べるのがまたいいのですよ」

「…………あたしの金で食えるからだろうに、ちくしょう」

「はっはっは。現実は無情なり、ですよ」

気の抜けるような笑い声をあげて御品書きを見つめていた茉莉は、「うん、これにしましょかね」と呟く。どうやら注文が決まつたようだ。瑠璃も自分が食べる物を選び、店員を呼ぶために手を軽く

挙げる。

それに気づいた店員が来ると、「アプトノスのハンバーグセット。スープはポタージュで」と告げ、茉莉へとさあ、注文しろと言う風に見配せする。

店員も茉莉へと視線を移し、彼女はこほんと咳払いを一つ。そして

「アプトノスの霜降りステーキセット、アプケロスのサイコロステーキ、ポポノタン焼きとモスの味噌汁、ガーグアのから揚げ。セットのスープはコンソメで、ライスは特盛でお願いいたします」

「ちったあ遠慮しろちくしょおおおおおッ！？」

「だから言ったでしょう、現実は無情なり。賭けの敗者から搾り取れるだけ搾り取りますよ、ははは」

「……………悪魔や……………悪魔がここにおる」

燃え尽きたように机に突っ伏する瑠璃の頭をぼんぼんと叩きながら「その悔し涙は明日の勝負の活動力となるでしょう」と囁きかけながら慰めるも、「慰めにもならないわよ……………」とさめざめと泣き崩れ、「どうしてこういう時の賭けつて毎回負けるかなあ……………金が、金がああ……………」とぶつぶつと呟きだした。

瑠璃と茉莉の賭けは二人の実力が安定したところから行われており、それはもう色々なものを賭けてきたものだ。今回のような夕食の奢りだったり、あるいは日用品の奢りだったり、パシリだったり……………実に多岐にわたるが大抵はパシリで済ませている。

瑠璃が勝つ場合は多くはパシリ権を得る時で、奢りが賭けられたときはあまり勝てたためしがない。そして茉莉はと言うと、今回のように奢りを要求する時によく勝ってしまう。

その度に瑠璃の金がどんどん消えていき、このようにさめざめと泣き出してしまう。

それを茉莉が微笑ましく、暖かな視線で見守るといふ構図が出来

上がってしまう。

（いやー、我が姉ながら本当に愛で甲斐がありますね。眼福眼福）

南無南無、と心の中で手を合わせるも、こうしてしまったのは茉莉である。今日もまた姉を弄れて満足だ、と感じながら軽く視線を店内に巡らせながら料理が運ばれてくるのを待つ事にする。

フェアが開催されているだけあって客の入りはなかなかのものだ。夕食時というのも関係しているだろう。二人と同じハンターだけでなく一般人の家族連れも多く見かけられる。

（おやおや、カップルもいらっしやいますか）

家族連れだけでなくぽつぽつと若い男女が料理を食べている姿も確認できた。向こうの席では東方人らしい黒髪をした男女が静々とステーキとハンバーグを食べ進めている。しかしよく見るとその耳は人間のものではなく、獣のような形状をした耳をしている。

少々斜め上に伸び、先端が尖り……比較するならば猫に近い物だ。それだけであるの二人が人間ではなく魔族である事がわかる。

こんな所で魔族を見かけるとは、珍しい事もあるものだと思うが、だからといって何かするわけでもない。基本的に魔族はあまり表に出てこないものだが、彼らの中にもハンターとして活動するものもいる。例えば二人の母親のように。

過去の大戦以降めつきり姿を見せなくなった一族もいるが、長い時を経て少しずつ世に出てきた一族もいる。それに自分達には他の魔族の知り合いがいるのだ。

今もなお実家があるポツケ村に住んでいる魔族の兄弟夫婦。

黒龍が舞い降り、ヴェルドにテオ・テスカトルが襲撃してくるという大事件が起こったあの日から少しずつ広まり始めた噂により、変装しなければ軽々と大きな街へと訪れる事が出来なくなった彼ら。

同時に彼らと親しくしていたあの三人もまた東方に向かった後ばったりと姿を消してしまっていた。

いや、一度だけ会った事があったか。あの二人の子供が生まれ、それを絵に残す際に隠れ家へと訪れたあの機会のみ出会った。それ以降また隠れ家を移したらしく、時たま連絡の手紙が来るだけどこにいいのかすらわからなくなってしまっている。

六年前のあの日以来、英雄と呼ばれた彼らは人々の前から文字通り身を隠してしまった。

それも仕方ない事だろう。あの噂はもうこの東方にまで届き、しかも昨今の不穏な噂と事件によって一部では重い空気が包み込んでいるのだ。

こんな状況であの血統に連なる者が人前に出てくれば何が起こるか分かったものじゃない。確実に良くない事が起こってしまうだろう。

(……やめましょう。今はそんな暗い事を考える時ではないです)

小さく首を振ると、カートを押してこちらに近づいてくるウェイトレスが見えた。そこにはいくつもの料理が並び、美味しそうな匂いを漂わせている。

「お待たせしました」

瑠璃の前にはハンバーグセット。鉄板の上に肉の焼けた音を立てながら芳しい匂いを漂わせて食欲を刺激してくる。突っ伏していた瑠璃も料理が運ばれてくると、ゆっくりと顔を上げてその料理を見つめていた。

だがすぐに視線を横へとずらす。

続けてテーブルの上に乗せられていくのは茉莉が遠慮なく注文していた料理達。

たちまちテーブルの上には多くの料理が並び、その空いた部分を埋めていく。これを一人で食べるのか、と普通の人々は思うだろうが、狩りに出かけたのだからその使ったエネルギーを補給するとう意味合いでがつつり食べられるものだ。

それに茉莉はこう見えて結構な量を平らげるだけの胃袋を持つ。恐らく涼しい顔で黙々と胃袋へと送っていく事だろう。

「それでは、いただきます」  
「……いただきます」

ウエイトレスが一礼して去っていくのを見送り、茉莉が手を合わせて言うと、続くように瑠璃も手を合わせる。そうして夕食をとり始める事になった。

瑠璃がハンバーグへとナイフを入れれば切れ目からは肉汁が溢れだし、鉄板の上でまた焼ける音を響かせてくれる。少し焦げた部分も合わせてナイフで切り取り、セットの隅にあるソースのカップに少し浸して口へと運ぶ。

咀嚼すればソースと絡んだ肉が柔らかく解け、舌に肉の旨味と肉汁を伝えてくれた。肉の味を引き立ててくれるソースとマッチし、実にいい仕事をした一品である。

その美味しさに少しだけ顔をほころばせるが、対面に座っている妹を見てその表情が硬くなってしまう。

まず茉莉はアプトノスのステーキから食すことにしたらしい。それはただの肉ではない、「霜降り」肉である。つまり高級品だ。それにナイフを通し、同じようにソースを絡めて口へと運ぶ茉莉。

ステーキの肉が焼ける匂いが対面にいる瑠璃にまで届いてくる。それだけではない、隣にあるアプケロスのサイコロステーキもまたいい匂いをしているし、モス肉と山菜をたっぷりを使用した味噌汁も美味しそうだ。

小皿にはポポノタンの焼肉が乗せられ、備え付けのレモンがある。

それを手にしてポポノタンへと絞って酸味を与え、ぱくりと一枚取って口へと運ぶ。続けて山盛りに盛られたライスを食べ、お茶を一口。

「……ふう、美味しいですねえ。いい肉です」

「……あ、そう」

「まったく、辛気臭い表情ですね」

「誰のせいだと思ってるのよ、まったく……」

そりや自分の金ではなく瑠璃の金で遠慮なく注文し、料理を堪能されているを見せられてはこんな表情にもなるわ、と心の中でぼやきながら瑠璃はハンバーグを食べ進める事にする。

付け合わせのポテトや人参も頂き、ライスやポタージュも味わっていく。

一方茉莉はサイコロステーキやから揚げにも手を伸ばし、それぞれの味を堪能していた。少し硬めの肉であるアプレロスのサイコロステーキは噛めば噛むほど肉の味が染み出てくるし、ガーグアのもも肉を使用したから揚げは柔らかく、すっきりとした味わいがある。あまり表情が変わらない茉莉の表情を少しほころばせるだけの美味しさがあるらしい。それを見、続いて料理へと視線を移せばまだ美味しそうな匂いが漂ってくるではないか。

「じくり……」

それを見せられては唾も呑み込みたくなるものだ。いくら自分も肉を食っているとはいえ、別の肉があれば興味も出てくる。まさに今の瑠璃は餌を前にした飼い犬のよう。それに気づかない茉莉ではない。

にやりと笑みを浮かべると、霜降りステーキをフォークで突き刺し、瑠璃へとちらつかせてみる。ほれほれ、とフォークを揺らして

いる茉莉の表情はちよつとしたいじめっ子のそれに近いだろう。

「食べたいのですか？ 瑠璃」

「ぬ、ぐ……嫌らしいわね、あんた……」

「はっはっは、こういうのもアリでしょう」

「ねーよ。あつてたまるか」

ジト目で睨むも一向にフォークをひっこめない。まったく嫌らしい妹だと思っていると、鉄板の上にその肉を置いていく。それだけではない、サイコロステーキも二つ乗せていき、ポポノタンとから揚げの皿も瑠璃が取れるように近くに寄せてくれた。

「私だけ食べるというのもあれですし、瑠璃にも少しばかり恵んであげましょう」

「茉莉……」

「現実は無情ですが、私は少しの慈悲があります。ふふふ、私も甘いですね」

どこか感慨深く呟く茉莉ではあるが、驚きからまたジト目に戻った瑠璃は冷静だった。

「いや、ここの支払いあたしだから。あんたの金じゃねーよ」

「細かい事は気にしないでいきましょう」

「細かいからっ！」

吼えながらもちゃっかりから揚げを手に取り、豪快にかぶりつく。からつと揚げられた衣の下にある柔らかなも肉の旨味、とろーりとした肉汁がじゅわつと溢れ出し、またしても舌が歓喜に震える。

「ちくしょう……美味しいじゃないのよ……っ！」

「それは何よりです。さ、一緒に肉を堪能していきましょう。……  
ということ、ハンバーグ一切れ、頂いても？」

「それが狙いか」

「はて、何の事やら？」

しれつと答える茉莉だがあながち間違っではないだろう。双子であるためか何となくお互いの考えはわかるものだ。しかしこうして霜降りステーキやから揚げ、ポポノタンまで貰っては何もしないわけにもいかないか。

「やれやれ、とため息をついてナイフを入れて一切れを茉莉のステーク鉄板へと移してやる。」

「ほら」

「ども」

なんだかんだ言っても二人は仲の良い双子の姉妹だ。姉と妹という立場が逆に見えるが、それでも二人は基本的に仲がいい。そうでなければポツケ村を出て二人だけでこのロックラックまでやってきてはいない。

そして長くコンビを組んで狩猟に出はしないだろう。コンビを組むという事はお互いの命を相棒に預けるという意味合いもある。深い信頼がなければやっていけない世界だ。

五年前にポツケ村を出た二人はこのロックラック地方までやってくると、ここを中心として各地を巡って着実に力を付けてきた。手を焼いていた自分の中の才能、火竜の力を完全に制御していき、様々な飛竜をはじめとするモンスターを討伐していき、経験を積んでいく。

レベルとしては上位ハンターのものになっているが、今は下位装備で通している。それは各地を巡っている為に上位ハンターの装備を整えていないという事もあるが、意図して二人は上位ハンターの

名に連ならせないようにしているのだ。

それは自分達が竜魔族という特殊なケースで生まれ、しかも有翼種という稀有な存在でもある。また世間はあの血統に対してよくないイメージを抱いており、自分達はその知り合いがいる。

そのため二人は暁という名前を伏せ、フレアウイングの名字で活動している。表向きには有翼種の魔族として活動しているのだ。その上で各地を巡り、姿を隠しているあの一家を探している。

相手が相手のため情報屋を利用する訳にもいかず、小さな噂やその足取りを探るといふ雲を掴むような探し方であるため、必要以上に目立たないようにしている。

とはいえ二人のやり取りのせいで一部のハンター達で名が知られるようになってしまっているのだが、そこはご愛嬌か。

何にせよ上位ハンターになれば儲けが増えるが、その分危険も増す。同時にそこで活躍すれば名が売れる。それすなわち自分達の事がよりハンター達の間で知れ渡る事になるため、それを回避したいというのが二人の考えだった。

だが上位ハンターのくせに下位装備で下位クエストを受け続けるというのもそれはそれで名が知れるだろうが、ぼちぼち上位クエストの一部をこなすことでそれを回避している。

つまり上位ハンターになりたてのほやほやであり、上位と言う壁に当たっているハンターである事を演出しているのだ。今はそれで何とかなっているが、時間が経てばその回避方法も通用しなくなってくるだろう。

自分達は普通の人間ではなく竜魔族。人間以上の力量を保有する事が出来る存在だ。いつまで経っても成長しない弱者ではない。これも持つてあと半年か一年少して通用しなくなるか、と考え始めている。

何せもつ自分達も二十歳になる。緊急事態で実力をつけていき、たった一年程度で新米ハンターから上位ハンターへと上り詰めたあの夫婦は十六歳でそれを成し遂げている。

あれから六年経った今でもその実力は衰えず、まだ成長しているのだ。その気になればG級になれるだろうに、境遇のせいでそれが出来ないでいる。

旦那は魔族ではあるが、妻は人間だ。しかも突出した才能を持たない人間。そんな彼女でも成し遂げられた功績。彼女と違い高い才能を保有している瑠璃と茉莉に出来ないはずがない。

当時よりも四歳も年上なのだから、今ではもう上位ハンターの間から後半にさしかかってもいい頃合いなのだ。

全てはこの変化した世の中によるもの。

ドンドルマ方面からこの東方にかけて変質していく人の想いが作り上げる雰囲気。これが彼女達の行動を縛り上げる。

本当に、やり辛い世の中になったものだ。

だが今ここにいる二人はそんなながらも関係なく、いつも通りのやり取りをしながら夕食を食べ進めている。これが彼女達の日常であり、こうする事でそのしがらみを忘れて時間を過ごせるのだ。

昔から変わらない関係を保ち、茉莉がボケて瑠璃がツッコむ。そうやって馬鹿やっているのが心地いい。いろいろ大変なことが起きているが、せめてこうしている時間だけは平穏であってほしい。

霜降りステーキ、サイコロステーキと消費していき、ポポノタンとから揚げを二人で分けて食べ、最後にライスと一緒に味噌汁をすすり、茉莉は「ご馳走様でした」と手を合わせた。

瑠璃と少し分けあったとはいえ、あれだけあった料理の大半が彼女の胃袋へと消えていったのだ。

周りの客達が啞然としているが、茉莉は気にした様子もなくナプキンで口元を拭ってお茶をすすする。

「満足そうね」

「ええ、満足ですよ。素晴らしい夕食でした」

「そ。じゃあ行きましょうか」

そう言って会計するために立ち上がり、置かれているそれを手に取った瑠璃は値段を確認してみる。すると「……くっ」と苦い表情を浮かべながら息を詰まらせた。やはりというべきか、そこに記されている値段は二人で食べる夕食のものじゃない。

普通の一般人も訪れるレストランで食べられるものだというのに、どうして値段が五ヶタ近くになっているのだろう。霜降り肉か？ やっぱり霜降り肉の影響が強いのか！？

そんな彼女へと向き直った茉莉は一度姿勢を正し、両手を胸の前で交差させてから振り下ろしつつ一礼した。

「ゴチになります！」

「……………ちくしょう」

もう何度目になるかわからない言葉を呟きながら哀愁を漂わせる背中が遠ざかっていく。

そんな彼女を温かい眼差しで見送りつつ、茉莉も席を後にした。

そんな一件があつた次の日、私服姿にローブを纏った二人はロッククラックの港へとやってきていた。赤いシャツに炎の柄が描かれ、黒に近いズボンという動きやすそうなものが二人の私服だ。しかもお揃いというのが双子らしい。

そしてローブはやはり火竜という事もあり、背中はりオレウスを模した絵が描かれている。

瑠璃はいつものツインテールだが、茉莉は狩猟の際に揉み上げに巻いていたリボンを頭の後ろに結んでいた。

二人はこれからロックラックを後にし、また各地を巡る旅を始めようとしている。一定周期で各地を巡ってロックラックへと戻ってくるという方法でこの五年を過ごすのが二人のやり方だ。

マンドラゴラを入手するためにヒュドラ討伐に向かったのが今回のロックラックでの最後のクエストとなる。これは調査で秘薬を作り出すための材料となり、昨日の内に作っておいた。これで秘薬の補充は完了する事になる。

さて、砂上船に乗り込んだ二人は部屋へと向かって場所を確認し、ロープを壁掛けに掛けてベッドに腰掛ける。

それから地図を広げてこれから向かう場所を確認する。

ロックラック地方は主に砂漠が広がる地理であり、西に進めばテロス密林、北西に進めばポツケ村があるフラヒヤ山脈がある。

北から北東方面に向かえば元々の実家がある国、華国に入る事になるがあつちには行かない事になっている。あそこは魔族に対してよくない印象を持つ者がそれなりに存在し、自分達が華国を出る事になった原因となった魔族狩りを行った過去がある。

わざわざそんな国に戻る理由もない。なので華国に行く路線は自然に消える。

南に進めば海岸線があり、その先には小さな島々が集まる諸島が存在している。主に漁業を営む村が点在しており、それで生計を立てているのが多い。

最後に東へと向かえば砂漠が終わり、緑豊かな草原や山々が存在する領域へと入る事になる。そこから更に東へと向かえば海となり、その先に島国であるシキ国が存在している。

それまでは無国籍であり、大小の街や村が存在する場所になる。

あの一家の故郷はその無国籍の山の一つに存在していた。その後別の山の一角に隠れ家を作り、暮らしていたのだ。

そして今乗っている砂上船の進路は東。砂漠が終わる所にある港町まで進み、そこから更に東の山へと向かう予定である。

山によって様々な特色があり、ある山は山の幸を生かした特産品

で生計を立てる村があったり、山間に作った畑から摂れる作物で生計を立てる村があったり、湧き上がる温泉で旅人を呼ぶ村があったりする。

「情報を求めるならやっぱりユクモがいいかしらね」

「でしようね。この一年でまた活気づいたらいいですから、もしかするとこっそり温泉に入りに来た事があるかもしれません。確か東方人は温泉が好きらしいですから」

「温泉というか風呂が好きだって聞いた事があるわね」

そんな会話をしながら地図を見る二人の視線はある一点に向けられている。山岳地帯の一角にあるその村はユクモ村。先ほどの例に挙げた湧き上がる温泉で山を越えていく旅人の安らぎの場を与えてくれる村だ。

数年前までは落ち着いた村でお抱えのハンターもいない場所だったのだが、村に危険な竜種が現れた事でギルド支部を設立してハンターを呼び、これを討伐した過去がある村だ。それからはギルド支部を置き、旅人だけでなくハンターもそれなりに訪れる場所になっているという。

二人も三年ほど前に訪れたのだが、一般人とハンターの割合は八：二ほどぐらいだったか。温泉街も旅人が多く、彼らによって賑わっているという印象だった。

そのためギルドとしての規模は小さく、クエストもそれなりでしか回されておらず、ハンターの活動の場としてはあまり向いていない。ここに訪れるハンターの大半は温泉に浸かって疲れを癒すという目的が有力だ。

そんなユクモ村が今回の目的地とする。

予定の確認が終わったところで小さく船が振動し、ゆっくりと進み始める。それを感じた二人は一度部屋を出て甲板に上がった。

畳まれていた帆が挙げられ、今まで停泊していた港、そしてロッ

クラックの外壁が遠ざかっていく。見れば他にも客達が甲板に上がっており、遠ざかっていくロッククラックを見つめていた。

中型の砂上船のためそれなりに乗客がいるようだ。やっぱり大半は人間が多いが、その中に竜人族と魔族が一組ずついる。気のせいかな魔族の方はあのレストランにいたあのカップルのようだが……まあいいだろう。

ロッククラックの外観が小さくなっていき、あとはどこまでも広がる大砂漠。変わりのない景色を眺め、吹き抜ける乾いた風を感じながら二人は新たな旅を始める。

あまり動けない彼らに変わり、行方知らずとなったあの一家の影を求めて。

## 肉だらけの夕食（後書き）

初登場時は二人は十三歳。

あの戦いが終わった時には新年を迎えられ、その年は十四歳。

それから六年が経っているため、二人はもうすぐ二十歳になる、という計算になっております。

……ということは今はいない彼らもいい歳になっているという事になってますね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3041y/>

---

モンスターハンター ~集いし者達と白き龍神~

2011年11月8日04時11分発行